

大衆酒場 「一二三」

夜の街を吹く風は、二月に入ると肌に突き刺さるようです。僕は、ベンチコートを羽織い、中には上下のトレーナーを着、スニーカーを履いて街をぶらついている。街をぶらつかなければならない理由は、当然ながらきちんとあつた。

日曜日の夜ということもあり、住宅街に人はほとんどいない。途中、日曜出勤の帰りらしいサラリーマンとすれ違った程度である。

暗い迷路のような住宅街の道路を一人歩きながら考えた。この夜の街角にいる寒さもきつけれど、家の中に吹き荒れる空気の寒さは、数倍きつい。家の中には、いわゆる家族と呼べる人達はいるけれど、自分だけぼつんと浮いている。寂

しさと背すじに伝わる寒さはたとえようがない。

僕は、通り沿いにある誰もいない閑散とした公園のベンチに座り、タバコを一本取り出して百円ライターで火をつけ、夜空に向かって煙をはき出した。冷えきった空気の中に、大量の煙が鮮やかに浮かび上がった。

(今の自分にとって暖まる場所はないのか)

はき出したタバコの煙は、空中を彷徨いながら風と共に消え、あとには量(かさ)を輪状にかぶった月だけがぼんやりと見えた。少し、空気もどんよりとしているような気がした。

僕は公園を通り抜け、相変わらず夜の街をぶらついている。歩くほどに、体の芯まで冷えてくる。寒さからのがれるため、ベンチコートのフードを深く頭にかぶって再び歩き始めようとした時、何やら遠くの路地角に赤いネオンがうつすらと小さく見えてきた。少しどんよりとした空気の中に霞(かすみ)が入ってきたのか、ぼんやりと浮かび上がった赤いネオン。僕は神秘的に輝いている赤いネオンに吸い寄せられるように近づいていった。近づくほどに赤色は鮮やかさを増した。そして

近づくにつれ、その正体がわかってきた。少し寂れた、いかにも古い飲み屋の看板である。「一二三」。なんて読むのだろうか。一瞬思った。

日曜日の夜に開いている店は、この付近ではここだけだろう。これ以上街をぶらついていたとしても、夜の寒さの餌食になるだけのような気がした。

「よし」

なぜか自分にかけて声をかけ、僕はその店の前に立った。店先の縄暖簾が夜風に少しだけ揺れていた。僕は、左手で縄暖簾を払い、入口の引戸を右側に引いた。

視線を店の中に移したとたん、突然目の前に女将の顔が現れた。

「いらつしやい。寒かったでしょう」

流暢な言葉が僕の耳に唐突に入り、一瞬たじろいで体が止まった。二、三秒たっただろうか、改めて女将に視線を合わせ言葉を返した。

「こんばんは」

奥行はあまりなく、こぢんまりとした広さのようだ。

したがって、入口の引戸を開けた瞬間、カウンター越しにいる女将の顔が必然

的に目に飛び込んできることになる。L字型に曲がったカウンターに座席は八席。

入口右側にカラオケの機械が置いてあり、カウンター奥の木製の棚にはグラス類が整然と飾られていた。木製棚の手前に電子レンジがあり、その上に置いてある招き猫が妙にこの店の雰囲気になじんでいる。

女将の目線で、L字型カウンターの入口からいちばん奥の席に誘導され、不安定そうなイスを後ろへとずらしながら僕は席に着いた。

「初めてですねえ」

じつくりと僕の顔を眺めながら、語りかけてきた。

「ええ、なんとなく店の看板に吸い寄せられてきた次第で……」

「ハッハッハ……、お客さんたら昆虫じゃないんですからねえ」

思いつきり高笑いした女将の顔がなごやかさを誘い、ユーモアのある言葉を聞いて少しほっとした。

「ところですみません。この店の名前、何ていうんですか」

「店の名はねえ、〃ひふみ〃っていうんですよ」

女将は一瞬笑みを浮かべながら答えたあと、カウンター越しの狭い洗場でコップと小皿を洗い始めた。沈黙が店全体に静寂を与えた。

「お客さん、ところで何を飲みますか」

「んー、いろいろと寒いので熱燗ください」

「ごめんなさいね。うちはねエ、冷や酒しか置かないんですよ。ですから、ご覧の通り徳利やおちょこもないんですよ」

女将は、後ろに飾ってある木製棚のグラスを指差した。

「ああ、そうなんですか。えーと、この際何でも飲みます。とにかくお酒ください」

女将はまた軽く笑みを浮かべたあと、酒の準備に移った。そのあいだ僕は、また店内を一望してみた。何ともいえない雰囲気が漂ってくる店だ。狭いからこそ、のよさがここにはあるように思う。座席の左側に視線を移した僕は、少しびっくりした。今では見当たらない8トラックのカラオケテープが歌手ごとに順序よく棚の中に並べてある。今となつてはもう聞くこともかけることもないだろう。ほ

こりをかぶったまま並べてあるが、それ自体が店の装飾の一部になっているように思われる。

女将は冷や酒を一升瓶からコップに移し、僕の目の前に置き、その後、お通しを出してくれた。年の頃なら六十代後半であろう。何十年とこの商売をやつてきた風格があり、女将自身も店全体の装飾の一部として演出されているように見えた。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

客は僕だけであつた。日曜日の夜である。よっぽどの暇人以外は、家でくつろいでいる時間帯であり、街をぶらついている方が不思議な人種のように思われる。ましてや、そういう日に営業しているこの店も、また不思議なお店なのか。

「今日はまたどうしたんですか。日曜日の夜に……」

「ええ、家の中の雰囲気あまりにも寒いので、ちょっと散歩しようと思って外

に出たんですが、外気も寒い。どっかで酒でも飲もうと探していたところへ赤いネオンが見えまして。吸い寄せられるようにこの店に入ってきたんですよ」

「へえ、それはそれは大変な状況なんですねえ」

「ええ、まあ、そ……」

「おーい、女将」

僕の声がかき消されるような大声と入口の引戸を開ける音が同時に僕の耳に入ってきた。

ふり向いた視線に入ったのは、七十歳を超えた頃合いの、髪の毛のない職人っぽい風体。いかにも頑固そうな爺じいであつた。

店内に入ってきた爺は、慣れたようにイスを後ろにひきずって席に着いた。

「女将！ 酒」

呼びかけた言葉は淡泊であるが、いかにもここで自然に使われている会話なのだろう。

「にいちゃん、見たことないね」

減張めりはりのきいた言葉の音域と軽快さは、江戸っ子を自負しているようにさえ思えた。

「初めまして、ちょっと寒いんで酒でも飲もうかと……」

「そうかい——。女将、にいちゃんにも一杯やってくれよ」

「いいですよ。だいじょうぶです」

「何を言ってるんでい。これが俺からの挨拶よ……な、女将」

「お客さん、気にしないで。これがこの人のいつもの飲み方だからね」

僕は結局コップ酒三杯を、この爺からおごってもらうことになった。さほどのつまみがないなかで飲む冷や酒は効いた。このなごやかな雰囲気と爺の持つ大將的な器量、そして気風きふうのよさが、僕の口を開放的にさせた。

「家庭内がうまくいかないんです。自分なりに努力しているつもりなんですが、どうしても亀裂の入ったそのひびが修復できなくて——いつも最後はその場から逃げるように街をぶらつくんです」

僕は話したあと大きくため息をつき、目の前の冷や酒を一気に胃袋に入れた。爺

はうつむいている僕に向かって、

「にいちちゃん、夫婦はしよせん他人だろう。だから、互いにいたわり合い助け合
うんだよ。環境も生き方も、違った者同士いっしょになったんだ。よっぽど相性
がよくない限り、いつも相手を思いやって生きていかなくちや。自分でも努力し
ているかも知れないが、そこに本当の誠意がなければ伝わらないんじゃないのか。
どっかで逃げてしまえば、大切な誠意も軽く見られるんじゃないのかい。もつと
ぶつかっていきなよ。とことん尽くしてもだめな時は、きっぱりとあきらめるん
だ。それが男だろう——いつまでもぐじゅぐじゅするような男は、豆腐の角に頭
ぶつけて死んじまえ」

「あんた、お客さんに言いすぎよ」

女将は爺に向かって強い口調で窘めた。たしな

「女将さん、いいんです。その通りです。おやっさんの言う通りです。どこかに
決断できない僕がいつもいるんです。家だけじゃないんです。仕事でも、最後に
決断を迫られた時、人の顔色を見ながら決める自分がいるんです。最後は逃げて

しまう。『どう言おうが俺は俺だ』って言えないんです。だから、女房とうまくや
りたいと思い、僕なりに体裁をつくらせてみても、最後は逃げる自分がいるから、
本当の僕の思いは女房の心に伝わっていないんでしょう……でも、今どうしたら
いいのかわからないんです」

酒が僕の口の蛇口を開放してしまった。恥ずかしさも見栄も忘れて、僕はしゃ
べり続けた。爺は僕の言葉を親身になって聞いてくれて、時には相槌を打ち、時
には叱咤しったしてくれた。

まるで父親に子供が何でも無邪気に話しているような、そんな光景だったかも知
れない。二時間ほど女将と爺と三人で話したあと、僕は帰ることにした。久し
く味わったことのない心の充実感を覚えた。

「おやじさん、今日はすみませんでした。初対面なのにいっぱい愚痴を言ってし
まって……。女将さんにも……すみませんでした」

席から立って頭を下げた僕に、

「にいちちゃん、俺、あんた気にいったよ。時々この店に来てるから、また会おう

ぜ」

「そうよ、お客さん。こりずにまた来てくださいよ」

「ありがとうございます。また来ます」

僕は再度礼をして、入口の引戸を開け縄暖簾をくぐって家路についた。

外の寒さは相変わらずだったが、心の寒さは和らいだようだ。体も酒のせいでポーツとしていた。

僕はその後幾度となく「一二三」に通うようになった。行くごとに、初対面の人達と顔なじみになり、少しずつ会話もするようになっていった。店の女将が日曜日の夜に来た珍客として僕のことを常連達に話していたらしく、「君があの日の方か」と以前から顔見知りの如く親しげに接してくれた。

互いに仕事や名前など、それぞれが背負ったものは詮索せず、この店にいるひと時を楽しく過ごすことが「一二三」のルールのように感じられた。

むろん、おやじさんとは店で会うことは何度かあったが、他の客がいる時は特

に僕に声をかけることはなく、いつもの気風のいい江戸っ子爺としてみんなと楽しく飲んでいた。

女将がきちんと知っている人は皆から名前で呼ばれていたが、僕はなぜか、最初おやじさんが言った「にいちちゃん」と、女将や皆から呼ばれるようになっていった。

おやじさんに叱咤されて、家庭や仕事に対して自分自身変わろうとしているものの、なかなか進歩はない。ただ、この店に来るようになってから、心の安らぎだけは味わえるようになっていた。

今夜も僕は、あの店に向かって歩いている。夜空には少しだけ星が見え、なま暖かい風が前方から僕に向かって吹いていた。Tシャツにジーンズそしてサンダル履きという夏季特有の服装だった。

（考えたら、あれから半年たったのか）

くわえタバコで歩きながら、時間の早さを少し感じた。

僕はいつものように店の引戸を開けようとして、やめた。店の中が妙に静まり返っている気配を感じたからだ。縄暖簾をずらして中を覗いてみた。僕が最初この店に来て座った席に女性客が座っており、女将となにやら話し込んでいた。僕は帰ろうとしたが、手が引戸を開けてしまったのだ。

「こゝこんばんは。だいじょうぶ?」

「にいちやん、だいじょうぶよ。席はいっぱい空いているんだから」

女性客があわてておしほりで顔を拭いていたのは、汗を拭き取るのではなく、流した涙を隠すためのような気がした。

彼女は僕より少し年上に見えた。目の前に置かれた冷や酒を一気に飲みほした彼女は、努めて明るさを装うような歌を三曲ほど立て続けに歌っていた。僕は、いつものように女将から差し出された氷入りの冷や酒を呷り、彼女の歌の合間には拍手をし、演歌の時には「よお〜」と相槌を打ち、彼女の曲を自分なりに盛り上げていた。

何度かこの店に通っているうちに、彼女とは今まで数回程度会話したことはあつ

たが、特に気にも留めずただここで会う人、そんな感じでしかなかった。

僕も女将に勧められ、二曲ほど歌った。歌いながら何気なく彼女の行動を見ていたが、入ってきた時に見た暗い表情をどことなく引きずっており、天井を見たり下を向いたまま酒を飲んだり、落ち着かない様子が手に取れた。

「もう今日は帰ったら?」

と女将は彼女に告げた。

「うん」

と一言いうのが精一杯だったのだろう。取り繕っていた心と体のバランスが崩壊した時、彼女は一気に泣き出してしまった。

「今は別れたくないのよ。ママ、どうしたらいいのかわからないの」

その言葉までは聞き取れたが、あとの言葉は泣きながら発しているので聞き取れず、女将は彼女を抱きかかえるように店の外に連れ出していった。

数分ほどして女将も涙顔で戻ってきた。

「にいちやん、今日はごめんね。何度かにいちやんも会ったことあると思うけど、

彼女、今ご主人ともめて大変らしいの。小さな子供もいるみたいだし、今は彼女、別れたくないって言っていたけど……。どうもご主人、時々彼女に手を上げるみたいで、親にも相談できず困っているみたい。今日はごめんね」

「僕がかまいません。人間誰でも心に悩みはあることで、僕もここでおやじさんに叱咤されましたが、なかなか変われません。努力はしているんですが……。どちらにしてもなかなか踏ん切りがつかなくて……。それにしても、女将さんも大変ですね」

「いいのよ私は。もうじき迎えが来るだけだもの。私がそばにすることで、少しでもみんなが楽しくなれば、それで十分よ」

僕には返す言葉がなかった。ただうなずき下を向いた。ここまで人を受け入れる寛大さは、今のところ僕にはない……。だろう。

帰りの夜道、僕の頭の中だけは活発に動いていた。いろんなことがぐるぐると頭の中を飛んで收拾がつかない。体裁を捨てきれない僕がいるのですべての答えはいいわけになってしまう。そう自問自答する言葉だけが相変わらず頭の中を飛

んでいた。

一週間ほどして、僕はあの店で、またもめ事に巻き込まれてしまった。同僚と二、三軒はしごしてきた帰り、午前零時を回った頃だった。何となくあの店に寄ってから帰ろうと思い、縄暖簾をくぐり引戸を開けた。すると年の頃なら三十歳ぐらいの男性が女将と口論していた。

「いらつしゃい。にいちちゃん聞いてよ」
突然、話をふられた僕は戸惑った。

「——どうしたんですか、女将」

「この子、何べん言ってもわからないのよねえ。だめなのよねえ」

「俺だって一生懸命やってるんだよ」

彼は大声で女将に言い返していた。

僕は彼にも「こんばんは」と挨拶をした。言葉を聞いた彼は、こちらをふり向き「なんだよ。にいちちゃんじゃないですか」と安心したような表情で笑った。

見ると彼は、この店で「坊ちゃん」と呼ばれている、ラーメン屋に勤めている青年だった。長身で一八〇センチはあるだろうが、三十歳を過ぎても童顔なので、ここに集う常連さん達から、いつのまにか「坊ちゃん」と呼ばれているそうだ。

「俺、今まで勤めていた店が閉店になってしまったんで、少し遠いんですけど全国チェーン展開しているラーメン店に移ったんですよ。だけど、店の人達とうまくいなくて……。ママに、俺はこうしたいんだって言ってるんだけど、あんたはすべてが甘いつて言われるんですよ」

「へえー」

と返事をしたものの、坊ちゃんの口から出た「甘い」という言葉に、自分自身もどきっとしてしまった。僕は坊ちゃんの背中を軽く挨拶がわりにたたいて、隣の席に座った。

「女将、酒をくださいよ」

二、三軒はしごしてだいぶ酔ってはいたが、「甘い」という言葉を脳裏からかき消すため、冷や酒をぐいっと飲みたかった。

女将は舌打ちしたあと、「あいよ」といつものように氷入りの冷や酒を目の前に出した。

コップを置くと同時に、

「でもさー、にいちちゃんからも言ってるよ。人生や仕事はそんなに甘くはないよって。自分が殿様や王様なら自己中心でもいいでしょうけど、他人同士の集団の中、ましてや仕事が替わったばかりなんだから。相手のことも気づかって仕事しなきゃいけないでしょう。今まで「井の中の蛙」でやってきているから、根本から考え方を変えなきゃだめよね」

女将が語った言葉は、僕を介しての坊ちゃんへの戒めなのだろうが、すべての言葉が僕にもあてはまっているようで、坊ちゃんが今の僕の鏡のような気がした。僕は能書きは言えず、ただ「坊ちゃん、がんばろうよ」と言うのが精一杯だった。

うまくいかないから知恵をしぼり出す。人生の先輩の話を聞いて自分の肥やしにする。

僕はこの店に偶然来たことにより、自分がさまざまな面で感化され、他人の言葉を寛容に受け入れる心ができ、多くの知恵が自分の肉になっていくことを実感していた。

坊ちゃんは、相変わらず女将と何やら口論ぎみに会話していた。見れば親子ほどの年の差であり、かわいい子供のことを心配して、おふくろが親身になっている、そんな風景に見えた。

僕は少し独り笑いをしていた。

(こういう口論は情があつていいかもな)

やがて、ガラガラと入口の引戸が軽快に開けられた。客は、先日この店で会った僕より少し年上に見える女性と、三十歳前後のすらりとした体型の女性、二人組であつた。

「こんばんは。ママー」

彼女達もどこかで飲んできた帰りであろう。酔いもほどほど入っていると見えて、やけに陽気に店の中に入ってきた。

年上の女性は坊ちゃんの左隣に座り、三十歳前後に見える女性は、彼女の左隣に順次座った。

「この前は、ごめんね」

年上の彼女が僕に向かって声をかけた。

「いいえ、全然気にしていませんので……」

「私、とも子といいます。この店では、みんな“とも”って呼んでるの」

「私は純です。ちよつとかわいいおにいさん、よろしくね」

ともちゃんのあとに、三十歳前後の女性が口を開いた。彼女とは、今日初めて会ったが、やけになれなれしさを感じた。

「ママ、今日カラオケボックスでいっぱい歌ってきたの。歌いすぎちゃって声からから。のどが渴いたからお酒ちょうだい」

「本当に大丈夫？」

女将は坊ちゃんとの口論をやめ、ともちゃんに声をかけた。

「大丈夫、大丈夫。私だつてうさ晴らししなきゃー疲れるのよねえー」

ともちゃんは、「一二三」の狭い天井を見上げながらため息まじりにつぶやいた。
「そうよ、そうよー。飲んじゃえ」

相変わらず陽気な純が叫んだ。

「ところでおいさん、私そっち行ってもいい」

純は出された冷酒を一気に飲みほしたあと、席を立ち僕の方に近づいてきた。

「よし、今日は飲みましようよ。女将」

僕自身、酔いはまわっていたがとにかく飲みたい、そんな心境になった。先週、この店で会った時のともちゃんの行動を見て以来、彼女の心境を考えれば他人事に思えなかったからだ。坊ちゃんは、女将との口論から解放され、品数の少ないこの店のつまみ「いかの干物」を口の中で何度も噛みながら、何やら独り言を言つて酒を飲んでいた。

「どうも、初めまして。僕はこの店で何やらみんなから『にいちちゃん』と呼ばれているんですが――」

「ちようどいいじゃない。私から見たらお兄ちゃんだし……。にいちちゃん、にい

ちゃん」

「あまりからかわないでくださいよ」

「いいのいいの。こうやって楽しく飲むことでともちゃんだって喜ぶんだし。主人は今頃、子供の面倒見ているし。楽しくやろう」

「そりゃ、まずいんじゃないんですか。考えてみればあなたは母親なわけだし。もしたら早く帰った方がいいんじゃないですか」

詮索すぎたかも知れない。ともちゃんを元気づけてやろうとしていた純に、僕は酒のいきおいでつい説教をしてしまったようだ。

「何言ってるのよ。そんな私の勝手じゃない。どこで何しようといいじゃない」
「旦那に子供の面倒はまずいよ」

その方向に進んでしまった以上、言葉は勝手に出てくる。自分自身のふがいない行動は棚に上げて僕はまたしゃべってしまった。

その時、ともちゃんが口を開いた。

「にいちちゃんも純もやめて。私が答えを出せなくていつも悩んでいるから、こう

なってしまうの。みんなに迷惑かけてごめんね」

頭から冷水をかけられた、そんな気分だった。僕も自分なりに悩んではいたが、恥ずかしい悩みに思えた。彼女の切なさの声が内心から伝わってきた。

「私の実家は向島で料亭を営んでいるの。小さい頃から何不自由なく育ててもらった。料亭に出入りしている芸妓さんやお店の板さん達からお嬢、お嬢と呼ばれていたけど本心はあまりうれしくなかった。学校から帰ってくる頃は、お店は仕度の真っ最中で私はいつも一人で食事していたの。自分の部屋でいつも鏡に向かつて話しかけてたの。楽しい会話をしながら父や母と食事したいね。でもだめよ、そんなわがまま言っちゃいけないでしょ、と自分に言い聞かせてたわ。」

母は私のおとなしい気性を思い、女子高、女子大へ進学させたの。高三の時、偶然通学途中の駅で出会った男子校の人にひとめぼれして、二ヶ月たった頃思いきって告白したことがあるの。心臓どきどきだったけど、告白は成功し交際を始めたわ。でも両親にはわかるのよね。私の行動がおかしいと問いただされたの。私は言ってやったわ。いつも一人で寂しかったし、彼といればとても楽しいから、こ

れからも交際はやめないって——。そしたら、おまえはまだ子供、やめなさいって。それで、絶対許してくれないんだったら、家を出て彼と駆け落ちするわって言ったの。そしたら両親泣いちゃって——」

ともちゃんは、左手にコップを持ち冷酒を口の中へ入れた。右目からは、涙が落ちてるように見えた。小さい頃からの思い悩みが頭の中で交差しているのであらう。肩で呼吸したあと、さらに冷酒を胃袋に入れ、ふたたび語り始めた。

「私って昔から一旦男の人に惚れてしまうと、もう周りが見えなくなってたの。その後も何度か男の人とつき合ってたけど、女子大の四年の時、サークル仲間と遊び半分で新宿にある『エルドローラ』っていうホストクラブに行ったの。『私達、女子大生』って言ったら、彼らすごくやさしくしてくれて。中でも、ああいいなあと思った彼が私に随分やさしくしてくれて。」

その後、何度もサークルの仲間達と通ったわ。みんなお嬢様だから、親に『大学で使いたい物を買いたいからお金ちょうだい』って言えばすぐにくれたし、そのお金を持って、またホストクラブに行くの。そして、最初見た時いいなあと思っ

て、私にやさしくしてくれた人が今の主人。両親にも紹介したけど、当然ながら猛反対。あの手この手で邪魔されたけれど、されればされるほど好きになっちゃうのよね。高三の時、冗談半分で両親に言った駆け落ちを、今度は本当に彼としたの。私って本当に好きになっちゃうと周りが見えなくなるよねえ。……はあー」
 ともちゃんがはき出したため息は、本当に心の中から発しているように思えた。「最初は本当に幸せだったの。私には手の届きそうにない気がしていた彼だったし、すごくやさしくしてくれたし——」。

なかなか子供はできなかったけれど、五年くらいしてやっと女の子に恵まれたの。彼も潮時だなぁって言って、ホストを辞めて普通の仕事に就いてくれたし。これから三人で幸せに暮らせると思っていたの。その矢先、彼が軽い脳梗塞で倒れて……。先生からはいいたことないからって言われてほっとしていたんだけど、退院して半年ほどしてから言葉遣いが荒くなったの。一時入退院していたせいか、仕事もあまりうまくいかなかったのかなあ。

言葉の暴力が始まり、特に家に帰ってきてお酒を飲み始めると、「ばか」だなんだ

が始まって、娘にも『おい』とか『おまえ』とかすごい口調でしゃべり始めて、私が『やめて』と言えば『うるせー』って言い返して。そのうち平手で打たれたりするようになってきたの。多分、『おまえは俺に惚れているんだ』ということもあいまっただと思うけど、だんだん過激になってきて……。

私は、好きで結婚した人だから別れたくないの。ましてや駆け落ちまでしていっしょになったでしょ。

どんどん暗闇に入っていくようで。病気の後遺症でこうなってしまったのか、私がかさしくすればするほど過激になっていくような気がするし。考えれば考えるほど、頭は混乱するし、子供のことを思えば片親にさせたくないし。でもこのままだったら子供だっかわいそうだし、駆け落ちしたから親のところへも恥ずかしくて行けないし——。

三週間前、平手だけだったのがとうとうお腹を蹴られたの。病院へ行ったら肋骨にひびが入っているって……。――

ともちゃんは、両目から涙を流しながら自分の人生をふり返るように語ってく

れた。

「だから先週、女将にどうしたらいいのか相談していたの。あの時、急に泣き出して、にいちやんびっくりしたでしょう」

ともちゃんがグラスを持とうと顔を下に向けた時、涙はさらにとめどなく流れ始めた。

嗚咽おえつに似た声と涙に覆われた彼女に、かけてあげる言葉はなかった。かけてあげるほどの言葉を僕は持っていなかった。

あまりにも、自身の悩みが小さいことにあきれ果てた。それに比べて真正面に人生を見据えて生き、そこで与えられた悩みを背負いながらも一生懸命生きているともちゃん。

最後には逃げて、臭い物には蓋をするみたいに生きている僕。人間としての恥ずかしさと器量のなさを、ひしひしと感じていた。

女将はもちろん、先程まで僕とけんかしていた純、女将と口論していた坊ちゃんまでが、泣きながら彼女の言葉を聞いていたようだ。

何分たつたんだろう。女将がともちゃんにやさしい口調でささやいた。

「もう泣かないで。やさしいあなたなんだからきつといい方向にいくわよ。泣いて捨てた涙の分だけまた飲みましょうよ」

持っていたハンカチで涙を拭き終えたあと、

「女将、ありがとう。そうね、辛くさいことやめよ。さあ、飲みましょう」

ともちゃんは明るい笑顔で言い、僕達も互いに見合いながらうなずき、酒を飲むことにした。

本来陽気な性格であろう純は「あたし歌う」と女将にカラオケをリクエストし、軽快なリズムの流行りの歌を歌い始めた。

最近の歌にまったくうとい僕は、その曲を歌っている歌手さえ知らないが、純が楽しそうに歌っている姿を見ると、彼女こそがともちゃんの親友であろうと感じられた。できるだけともちゃんの心を解こうとしている純の歌声が、この店全体の空気をもなごませている。

彼女の陽気な歌が終ろうとした時、入口の引戸が開けられた。

「おーい、女将」

呼び方はまさしくおやじであった。江戸っ子気質のおやじは、いつものように少し肩を左右に振りながら入ってきた。空いている席に座るなり、

「今日はこの時分にけっこういるじゃねえか。何か暗そうだが、よーし、俺がおごつてやるから、さあ飲め」

威勢のいいおやじのセリフが出た。よくはわからないが、いかにも職人風で若衆を何人も使っている風格があると前々から思っていた。

女将は、おやじの言葉にすばやく、

「よーし、そうしましょう、皆の衆」

と、いつもの女将には似合わぬ言葉を僕達に発した。おやじは少し調子に乗ったのだろう、下を向いたままうなだれているともちゃんに向かって、

「おい、ねえちゃん。泣いてちゃ、幸せが逃げちゃうじゃねえか」

おやじにとつてみれば、元氣づけのため、男として少し照れを隠した言葉だったのだろうが、ともちゃんにしてみれば「幸せが逃げちゃう」がいけなかったの

だろう。下を向いていた顔を突如おやじの方に向け、

「あんたに私の何がわかるのよ。冗談じゃないわ」

いかにも怪訝^{けげん}そうにおやじに向かって言葉を投げかけた。

言葉を受けたおやじの顔は、みるみる変わっていった。ともちゃんを見つめ少し照れていた顔は、やがて硬直し両手をにぎりしめ下を向いた。そして、大きく深呼吸をしたあと、目の前の冷酒をぐいっと一杯飲みほした。

「なに、上等じゃねえか。甘ったれて、人生もろくにわからないお前に言ってほしくないね」

おやじも言わなければよかったのに……。

はき出された言葉に、ともちゃんはキレてしまった。不安定にきしむ赤色のイスから立ち上がり、おやじに目線を合わせた。泣いていた顔からは涙が消え、まるでおやじに襲いかかるぐらいの殺氣が全身から漂った。

「いつも、しゃんしゃか飲んでいるあんたとは違うわよ。このジジイ——」

もう収まらなかった。互いに罵声を浴びせ合い、収拾のつけようがなかった。僕

は何度も二人が楽しそうに飲んでいるところを見ていたし、直接その会話には入らなかったが、ともちゃんはおやじのことをすごく尊敬している態度で話を聞いていたし、おやじはかわいい娘と話しているような満面の笑顔でいつも会話していた。でも、今日は収まりようがない。

やっと女将が仲裁に入り、二人を落ち着かせ両方に冷水を飲ませたと、

「今日はともちゃん帰りなさい。おやじさんだって悪気があつて言つたわけじゃないし、おやじさんの気心はあなたがよく知っているでしょ。今日は互いに酔っているの。いろいろある人生、時にはこんな時があつてもいいかも知れないけど、互いに許し合い、今度会う時は、仲よくここで飲んでよね。今日は帰りなさい」

冷水を一気に飲んで落ち着いたのか、ともちゃんはゆっくりと席を立ち、後を追うように純も席を立つた。引戸を開け、二人は縄暖簾をくぐって帰つていった。男だけになった僕と坊ちゃんとおやじは、それから三十分ほど酒を飲み、「一二三」をあとにした。

「あー、俺も年かな、女将。ここに来るやつらみんなかわいいんだ。自分には子

供がいなかったから、ここでみんなと飲む酒がたまらなく好きなんだ。つい親心が出ちゃつて、ごめんな女将、あとで彼女達にあやまつておいてくれや。今日はごめんな」

女将に向かって独り言のように言つたおやじの言葉が、僕の心の中になんとか残つた。

この年の東京の残暑は厳しかった。いつになったら暑さは和らぐのだろうと毎日思いながら仕事をし、何となく家に帰る日々を過ごしていた。

それでも日本には、四季という恵まれた環境はやっぱりあつたようだ。何を言つても十月頃になれば、それなりの気候と寒さはやつてくる。そろそろ本格的な秋の到来、季節の変わり目、知らず知らずのうちに、また東京にも寒い冬はやつてくるのであろう。

十月の中旬、僕は仕事やら私用やらで遠のいていた「一二三」に足を運んだ。
(女将は元気だろうか。常連達は相変わらず通っているのだろうか)

特に心配する必要はないのだけれど……。

「女将、久しぶりです」

と調子よく挨拶した。何か重苦しい空気が全体を覆い、女将の目線は焦点がずれたかのように天井を漠然と彷徨っていた。何人かの常連もカラオケを歌うわけでもなく、少ない品数のつまみを食べながら飲んでいるだけだった。僕は入口の引戸を締めた。その音に気づいたのか、女将が僕の方を向いてやっと言葉を返してくれた。

「にいちゃん、元気だった？ きつとあなたにも“来てほしい”って呼んだのよねえ」

何を言っているのか、わからなかった。いつもなら「いらつしゃい」と元氣よく言ってくれる女将なのに、今日はとんちんかんな答えのような気がして……。

「ここに座って。いつものでいい？」

「お願いします」

女将は慣れた手付きでいつものように氷入りの冷酒を出してくれた。そして、僕

がそのコップを持った様子を見て、

「今日は献杯よ」

と確かに言った。

「はあ？」

とあつけにとられて言うしかなかった。一杯飲んでコップをカウンターに置いた僕に向かって、

「にいちゃん、いつもここに来てよく飲んでいたでしょう、あなたの名付け親のおやじさん。あの人が亡くなったの。死んじゃったのよー」

と同時に女将の目から涙があふれ出してきた。こんな姿の女将を見るのはもちろん初めてだし、おやじが死んだと言われても信じられず、頭の中が真っ白になった。

僕にとっては叱咤激励してくれた人だし、この店にとってもおやじの存在は大きかったと思う。みんなに好かれていたし、時々見せる愛嬌は、何ともいえずに、人間としての器量を表していた。女将にとっては歳も近かったし、胸にぽっかり

穴が空いた心境なのであろう。ここに座っている常連達もまた、同じ思いなのであろう。だからこそ、こんな重苦しい空気になるのだ。

ふと見渡せば、片隅にともちゃんが座っていた。下を向いたまま、じっと目をつむっている。彼女自身、ここで会ったおやじとのやりとりを回想しているのか。全身から力が抜けたように両肩を落とし、すするように時々酒を飲んでいた。少し落ち着いたのか女将が口を開いた。

「にいちちゃん、私も知らなかったのよ。あのおやじ、はしが好きだったでしょ、三、四軒はしごしないと気がすまない性分だったから。店に来なくても気にしてなかったんだけど、よく行ってた店のママから偶然聞いたのよ。月曜日の朝、作業現場に行かなかったみたいで、夕方心配した鳶の親方がアパートに様子を見にいったんだって。部屋にはカギがかかっていたから大家さんに空けてもらって中に入ったら、死んでいたんですって。なんでも亡くなったのは日曜日の明け方らしく、一日半も発見されないで……。そのあいだ、一人で寂しかったでしょうね――」

「女将さん、おやじは親方じゃなかったんですか。あの気風のよさ、器量を考えたら親方なのかなあと思っていたんですが」

「それがねえ、親子ぐらい年の離れた親方に使われていたみたいよ。仕事の要領はそれほどよくなかったらしくて、時々みんなの前で親方に怒鳴られたりもしていたんですって。知り合いのママがおやじの友達から聞いたらしいけれど、泣きながら私に話してくれたの。かわいそうすぎるって……」

僕達に全然見せたことのないおやじの人間像、改めておやじのすばらしさと人間としての心の広さを感じた。ともちゃんは終始下を向いたまま酒をすすっていた。女将から今聞いた内容をともしっかりも聞いていたのであろう。ともちゃんとおやじがけんかした時言った、

「人生もろくにわからないお前に言ってほしくないね」

という言葉の重みをともしっかりも感じていたろうし、僕自身の胸の中にも、改めて重く響いた。――おやじ、安らかに眠ってください。

僕はその後も「一二三」に通っていた。坊ちゃんやともちゃん、純にいつも会うわけではないが、「この前、坊ちゃん来てたわよ」とか、行くたびに女将は教えてくれる。

ここに来る常連達も含めて、どこに住んでいて何をしている人なのかほとんど知らない。詮索しないのがこの店のルールであるし、ここでひと時を楽しく飲むために来るだけなのである。みんなが女将のところに集合し、楽しんで帰る。酒飲みにとってはそれがいいのかも知れない。あまり昼間の顔や悩みを共有しあつたのでは楽しい酒が悲しい酒になる恐れもある。

僕自身の悩みは相変わらずであるが、多少月日を経て家の中にマッチをすつた程度の明るさが見えてきたようにも思う。これも亡くなった「おやじ」の言葉のおかげなのか――。

ともちゃんは相変わらずご主人の暴力のことで悩んではいるが、答えを出せずに生活しているみたいと女将は話していたし、坊ちゃんはラーメン屋でなかなかみんなとうまくいってないらしい。女将とはその後も何度か口論しているという。

そしてまた夏が来た。今年の春の長期天気予報では、冷夏になると言っていたのが、この暑さは何なんだ。誰に愚痴を言えればいいのか、たまらない猛暑である。僕は毎日、外回りの営業をしているので、特にこの暑さは耐え難かった。

「一二三」には少し御無沙汰していた。毎日疲れて家へ帰ってシャワーを浴び、会話の少ない食卓で食事をし、その後自分の部屋に行き、少し寛ぎ^{くわが}して床につく。そんな感じの毎日を僕はくり返していた。日々の中で家庭内に多少の光明は見えてはきたが、どうも妻とはしつくりいかない。

そんな七月のある日、僕は久しぶりに「一二三」に行くことにした。猛暑のせいもあり、氷入りの冷酒を思いっきり胃袋に入れたかった。

去年の秋に「おやじ」が死んで以来、女将は何となく元気がなくなり急に老け込んだように見える。ともちゃんや坊ちゃん達は元気であるのだろうか。会えるかどうかは別として、彼らの近況も知りたいと思った。

縄暖簾をぐぐり引戸を開け、店の中へと入っていった。

「いらっしやい、にいちやんじゃない。御無沙汰、元気だったの」

女将の軽快な言葉に僕はほっとした。

四、五人連れの客が入口前の席に座っており、僕は女将の目線に誘導され、いちばん奥の席に座った。

「女将、氷入りのぐつと冷えた酒ください」

「あいよ」

返す言葉も軽かった。四、五人連れの客は一時間ほどカラオケで歌い、酒を飲んだあと帰っていった。替わりに久しぶりに見るともちゃんと純が、どこかで飲んできた帰りなのか、少し顔を赤らめて入ってきた。

「こんばんは」

と僕の発した言葉に、

「あらー、元気だったの？ よかった」

と、ともちゃんは言葉を返し、

「にいちやん、またいっしょに飲めるね」

と純が答えた。

だが三人で互いに世間話をしながら飲んでいても、妙に暗かった。互いに引きずっている悩みの度合いは違うが、おやじさんが死んでから女将を含め、なぜか飲んでいても明るくなれない、そんな雰囲気が漂う。

そして、午後十時を回った頃であろうか、入口の引戸を開け、「暑いよ、女将、まいったよ」と叫びながら坊ちゃんが入ってきた。

「坊ちゃん、随分と明るいじゃないの」

「俺、今働いている店辞めるから。もういいんだ」

と少しやけぎみに坊ちゃんは女将に答えた。ともちゃんが坊ちゃんに向かって、「もう少し、がんばってみなさいよ」

と声をかけたが、

「ところでともちゃんはなんですか。子供のことを考えれば、今後進展しそうですね」

と坊ちゃんは偉そうに答えた。ともちゃんは返された言葉にただ下を向いてう

なずいているように思えた。坊ちゃんは少し言いすぎた自分に気づいてか、その後は黙って冷酒をすすっている。自然とみんなお通夜のような妙な静けさの中で飲んでいた。どれくらいたっただろう。

突然、縄暖簾が互いにこすれ合う音が店の中に響いてきた。外の風が強くなったのかとみんな入口の方に目を向けた時、引戸が勢いよく開いた。

「おい、女将、元気か」

左右の肩を少し前後させながら、おやじが入ってきた。入口を見ていたみんなはおどろきのあまり、すべてが凍りついたように動かない。おやじは空いている席に座り、

「女将、いつもの酒」

と調子よく女将に注文した。

「おい、お前ら、どうしたんだ。鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をして、俺はな、お前らが心配だから今日来たんじゃないか。挨拶ぐらいしろ。にいちゃん、元気かよ」

おやじに声をかけられた僕はどうしたらいいのかわからず、ただ、言葉を返した。

「おやじ、生きていたんですか。よかった——」

おやじは女将から出された氷入りの冷酒に口を持っていき、一気に飲みほしたあと、左手で鼻をつまみ、

「なに馬鹿なこと言ってるんない。俺は死んだの。お前ら知ってるんだらう。俺はな、お前らがまだぐじゅぐじゅと悩んでばかりでちつとも前に進まねえから、心配であの世から帰ってきたんじゃないか。一回だけということでお釈迦様より許可をもらってこの盆の時期にやってきたのよ。今日は朝まで飲むぞ。俺も久々の酒だし、女将にもちよつと会いたかったし。これ以上、客は来ねえから心配すんな」

僕は忘れていた。お盆は八月だと思っていたが、東京では七月だった。田舎育ちの僕は、八月のお盆の印象ばかりだが、どうりで今日この店に来る途中、道路で花や桶を持った家族連れとすれ違ったはずだ。

「おやじ、申しわけございません。亡くなられたことは後日女将から聞きましたが、おやじがどこに住んでいて何をしていたのかもわからなかった。線香一本上げることもできなくてすみませんでした」

おやじは、二杯目の氷入り冷酒を半分ほど飲み、舌でころがし味わったあと、ゆつくりと語り始めた。

「俺こそ、ごめんな。俺は生きていた時分、この店でかつこつけて気風よく飲んで、粹にみんなと接していたが、本当は鳶職の手元だったんだ。仕事で、何度も子供ぐらい離れた親方に怒鳴られながらも辛抱して生きてきた。今まで職業はいろいろと替えたが主に建設業だった。なかなか人づきあいがうまくいかず、転々としてきたのさ。生きるために働かなければならない。そこでこの歳になってから鳶見習いつてやつよ。昼、現場でおもしろくないさ晴らしにこの店に来て、逆にいっぱしの人間のふりをして生きたかったのよ。お前らには物言える俺じゃねえけど……。この店に来てお前らと飲み始めてから、何かお前らがかわいくてしょうがない。特にともは旦那とうまくいつてない。手を上げる亭主に逆らえない。い

たたまれないほどかわいそうだが、俺にはどうしてやることもできない。せめて、元気づけだけでも思ったが、逆に怒られちゃった。まったくもって面目ねえ。

——とも……ごめんな」

「あー、おやじさん」

すがりつきながらともは大声で泣き出した。三、四歳の子供が親のふところの中に全身をゆだね、心の底から泣いている情景に見えた。

「とも、わかった。わかったから泣くな。お前はすべてに純粹なんだ。もう自分を責めるな。もう一度、自分の原点に戻り、駆け落ちしたんだっていう親への見栄も捨てて、素直に考えてごらん。お前が亭主を好いていることはわかる。でも、今のままじゃ前へは進めない。亭主も潰れるしお前も潰れる。子供にもよくねえ。ここがお前の正念場だ。新たな人生、未来を考えればこの山を乗り越えるんだ。きっぱりと道を決めて乗り越えていけ。俺は生きている時、かつこよくこの言葉をお前に言いたかったんだ。俺はいろんな人を見てきた。しがらみを乗り越えられず不幸のまま死んでいったやつも見た。お前にはそんな人生を歩んでほしくねえ

んだ。みすばらしい爺だけど、あの世から許しをもらって一度だけ帰ってきたんだ。今話したことを忘れずに悩みから脱出しな。子供と二人で新たな人生を切り開くんだ。お前の心を原点に戻し、再出発するんだ」

ともちゃんは相変わらずおやじにすがりついたまま動かなかった。おやじの言葉を素直に受け止めながら、両親への思い、亭主への思い、子供への思いを心を解放して考えていたのであろう。

「にいちゃんよ、お前は男だろう。女房から逃げずに守ってやりな。女房を大切に守れるのはお前だけだろう。ここに来て、うさ晴らしもいいが、それも今日で終わりだ。明日からは真正面から女房と向き合え。とことん誠意を尽くしてやってみな。それでもだめな時は、最初お前に会った時言ったように別れな。お前の場合は、とものと違って自分の人生から逃げているんだ。お前はとにかく真正面を見据えて、どんと人生を生きろ。俺からの最後の言葉だ。

純、お前はいつ見てもかわい。かわいから亭主はお前の甘えを許してくれる。ただ甘えすぎんなよ。男に飽きられてしまうぞ。大切な一人娘は、お前が全

身全霊で育てなきゃだめだ。女のやさしさ、かわいらしさをお前が子供に教えるくて誰が教えるんだ。いいな」

おやじは満面の笑顔で好きな酒を飲み、本音で語ってくれた。かつこつけてこの店に来ているんじゃない。やはりこの店での姿がおやじの本当の姿だったのだと僕は思った。

「坊ちゃん、お前は若い。人生そんなにつまらないものにするな。すぐにあきらめるな。これからお前はいろいろな人と出会うんだ。もつと地に足をつけ、自分を少し抑えて協和を大切に生きていけ。いいな。ただし、お前をなめて蔑さげすんだ目で見ているやつらとは、とことん勝負しろ。それも人生だ。あの世から俺が見守っているから心配すんな」

おやじと僕は、明け方まで実に楽しいひと時を過ごした。心のままに語り、心から喜び、心の奥底にあった悩みを互いに解き放っていったと思う。

夏の夜の時間はまたたく間に過ぎ、おやじは「そろそろ帰るよ、お釈迦様との約束だからな」と最後に言い残して席を立った。

「女将、元気だな。俺がここを出たあと、俺の姿を追うな。やがて夜が明け、この店に日差しがさし込んでくる。そしたらみんなも帰んな」

おやじは、引戸に一度手をかけたあと、僕達の方をふり向き、唇を少しゆるめて微笑んだ。やがて納得したのだろう、入口を開けて去っていった。縄暖簾がこすれる音がゆつくりと消えていく。静まり返った店の中ではあるが、前にはなかった爽快さが店全体を包み込んでいた。

「あなた、洗濯物取り込んでちょうだい」

僕は庭先のベランダに佇み、春の日差しを体いっぱい浴びていた。

今は、千葉の松戸に一軒家をかまえ、女房とさしてもめることもなく生活している。三年前のあの不思議な体験がなければ、こうした状況にいられたのだろうか。風の便りでは、ともちゃんは、その後正式に離婚し今は自立して暮らしているらしい。坊ちゃんと純もきつと元気であるだろう。

太陽の日差しの暖かさと緑の芝生の心地よさで、少し眠っていたのかも知れな

い。あのおやじは今、あの世で何をしているのであろう。あの世にある居酒屋で、楽しくみんなと毎日飲んでいるのかも知れない。

そうだ、今週末もう一度、大衆酒場「一二三」に行ってみよう。

僕の人生を変え、新たな人生へ導いてくれたあの場所へ……。